

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 東谷穎人先生を送る言葉

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/654">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/654</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 東谷穎人先生を送る言葉

福 島 教 隆

東谷先生の研究室の壁には、シュールな時計がかかっていた。スペインの画家 Salvador Dalí の絵をもとにした、一部が溶けて垂れ下がったような輪郭の時計だ。「学生のスペイン土産なんだ。ぼくのゼミのゆったりした雰囲気が出ていて、面白いだろう。」と、先生は解説された。しかし私には、その時計は、東谷ゼミはもとより、その底流にある、先生ご自身の周りに流れる独自の時間の象徴のように思えてならなかった。

東谷先生は大学卒業後、ある大企業に就職されたが、やがてそこを惜しげもなく辞めて、スペインのナバラ大学に留学された。この思い切った遠回りが、学問の結実とスペインへの深い愛情をもたらすことになった。

留学中は、先生にとって至福の時が流れた。「ラ・レヘンタ（地方裁判所長夫人）」と題する19世紀の小説を大学図書館の片隅で見つけた時は、その面白さに「数日間まさに息もつかずに読みふけった。」と述懐しておられる。大部の原書を読むことに何の気負いも圧迫感も持たず、心から読書を楽しまれたのである。後に先生は、この小説の邦訳を白水社から上梓された。

ナバラ大学では、「娘たちの『はい』という返事」という作品で知られる劇作家モラティンを研究テーマとして、博士号を取得された。その学位論文は、1972年に *El teatro de Leandro Fernández de Moratín*（レアンドロ・フェルナンデス・デ・モラティンの演劇）と題して公刊された。日本人によるスペイン文学研究がスペインで出版された嚆矢である。

ご帰国後、本学に奉職され、やがて私が在学していた大阪外国語大学でも

非常勤講師として教鞭をとられることになった。当時、学生語劇の監督をしていた私は、演じる作品について、非礼を承知で先生に相談に行った。他大学の学生に過ぎない劇団員や私を、先生は快く応対してくださり、たっぷり時間を割いて懇切丁寧に指導してくださった。お勧めいただいた演目は、かの「娘たちの『はい』という返事」であり、私たちはこの作品研究の第一人者の指導のもとに稽古を積み、上演するという栄誉をなうことができた。

先生がテレビ講座を11年の長きにわたり担当されたことは、よく知られている。当時のスペイン首相 Felipe González 氏が出演するなど、多くの話題を残した。しかし、実はその成功は、直前に担当されたラジオ講座入門編から始まっている。外国語講座に用いる例文は、村上春樹の「ノルウェイの森」で諷刺されているとおり、内容が空疎になりがちだが、先生はこの問題を驚くべき方法で解決された。

即ち、第1課から最後の課にいたるまで、例文はことごとくスペインの文学作品の実例を用いたのである。Juan Ramón Jiménez や Gustavo Adolfo Bécquer の詩、Camilo José Cela の小説、さらには「ドン・キホーテ」などから採られた珠玉の文章が、文法の難度に従って配列され、学習者に提供された。この着想と作業は、スペイン留学中、時の経つのも忘れて文学作品を渉猟して培われた素養あってこそである。作品引用にあたっての著作権の交渉や、朗読者の吟味といった問題も、ためらうことなく時間をかけて解決されたことと考え合わせ、先生の周囲には特別な時の流れがあるとしか思えない。この講座は、のちに「スペイン語の散歩道」と題する書物にまとめられたため、今でも私たちは先生の聲咳に接し、成人の鑑賞に堪える例文を通してスペイン語を学ぶことができる。

私が本学に着任した頃の先生は、研究・教育者として多忙を極めておられたはずだが、思い出すのは、港の見える六甲学舎の研究室で将棋に興じておられる姿、阪神タイガースが負けた翌朝のくやしそうな顔、古典落語の話など、悠然と流れる時に身をおく先生のイメージばかりである。あれだけのお

仕事を一体いつこなしておられるのか、当時から不思議だった（この点は、故 林一郎先生や木村榮一現学長についても同様である。あるいはラテン系精神の賜物かもしれない）。

東谷先生の授業は厳しいので有名だったが、学生からは満幅の信頼を得ておられた。研究室には学生が集い、そこには外界とは異質の時間が流れていったことは、冒頭に記したとおりである。その中から、後に学位を取得し研究者となる者も育っていった。

キャンパスが学園都市に移ってまもなく、先生は、スペインのオルテガ研究所との交流協定を結ぶことを提案され、持ち前の実行力でこの企画を現実のものとされた。凡人なら二の足を踏みかねない労力と時間が、東谷先生には苦にならないようであった。さらにアルカラ大学とも同種の協定を締結するにあたって尽力された。

この制度によって、本学の学生には、単位読み替えができる派遣留学の道が開かれ、スペインから赴任する専門家の授業が受けられるようになり、本学教員にとってもスペインの高等教育機関に籍を置き、研究教育にあたることが可能になった。この制度が本学にもたらした恩恵は、計り知れない。

1990年代に入ると、先生は「スペイン幻想小説傑作集」、「スペイン・ユーモア文学傑作選」、「たそがれ世代の危険な愉しみ」（Luis Landero作）などの翻訳を世に送られた。当時、先生が「自分が読んで楽しい作品を訳しているから、仕事は苦にならないよ。」と語っておられたのが、印象深い。そして1997年には、わが国におけるスペイン文学研究者にとって最大の栄冠の1つである会田由賞の受賞により、多年の功績が広く認められた。

また、日本文学をスペイン語圏に紹介する仕事にも従事され、現代作家についての簡潔にして当を得た記事をスペインの新聞にいくつも発表された。その1つの集大成が世阿弥の「風姿花伝」のスペイン語訳である。これはスペインの若手の研究者との共訳で、1999年にマドリードの出版社から出た。能のバイブルが平明なスペイン語に移し変えられ、詳細な注が施されている。

日本の古典芸能の中で能は海外でも注目されているが、スペイン語圏へは、林屋永吉以降、紹介がほとんどなく、待ち望まれていた分野であった。

その時期と相前後して、先生は学内の要職を歴任されることとなり、スペイン文学の読書三昧にふける時間も、気ままにスペインを訪れる時間も得がたくなってしまった。学生たちと直接接する時間も失われた。先生固有の時の流れは、大学運営のために消え去るかと思われた。

しかし多忙を極める公務の中でも、先生の周囲には依然、異次元が存在していた。学長に就任されてからのこと、先生は私に *Escafurcios y palabros* (言い間違いと誤用) という本を「面白いよ。」と言って貸してくださいました。「現状」という意味でしばしば *status quo* という表現が用いられるが、このラテン語からの表現の正しい形は *statu quo* である、といった言葉の豆知識が列挙された本である。その本を手にした私は、先生の次の言に舌を巻いてしまった。「1日の仕事が終わって夜、寝る時に、寝床でこれを読むとほっとするんだ。」私なら「こんな言語事実があったのか。」と驚いてメモを取り始め、安眠などできそうにない。学ぶためでなく、楽しむためにスペイン語の本を読む先生のスタンスをあらためて実感した。

東谷先生が卒業式などで語られた挿話の1つに「小鳥の絵」というものがある。小鳥を描いてくれという西洋人の求めに応じ、日本画家が作品を仕上げた。ところが肝心の小鳥は隅に小さく描かれているばかりで、余白が目立つ。注文主が苦情を言ったところ、画家は「この余白がないと、小鳥が自由に飛べません。」と答えたというのである。

先生の心には、大きな大きな余白が存在するに違いない。そして先生の周囲は、不思議な時間の流れによって護られているに違いない。

本学の重責から解放された先生には、スペイン文化の知の世界で過ごす時間を存分にお取りいただき、また引き続き私たち後進の者に「Dali の溶けた時計のような、ゆとりある心構えで研究対象と接すること」の大切さをお示しくださることを、心から願っている。先生、ありがとうございました。